

「ぜよ」はどこから——出自と動向を探る——

上野 智子

要 旨

「ぜよ」は広告・宣伝に登場する代表的な土佐弁、というイメージが先行しており、その実態はよくわからない。少なくとも、現時点において、高知県出身者の日常会話に「ぜよ」を聞く機会はきわめてまれな状況にあり、自然な発話例を得ることは難しい。

ここでは、以下の視点から「ぜよ」について考察した。

- 1 「ぜよ」はどのように用いられているか
- 2 「ぜよ」はどのように記録されているか
- 3 「ぜよ」はどのように語られているか
- 4 「ぜよ」はどのように生かされているか
- 5 「ぜよ」はどのように説明されているか
- 6 「ぜよ」はどこから来たか

少ない事例を補う資料として、聞き書き・民話などを援用し、現在収集できる広告・宣伝の分析も加えて、見えてきたのは「ぜよ」の次のような姿である。

- 1 「ぜよ」は、「ぜ」と「よ」とが複合した文末詞で、「ぞ」と「よ」の組み合わせである「ぞよ」とよく似た、基本的には相手に告げ知らせるという告知機能を持つ。
- 2 「ぜよ」の「ぜ」は、江戸で発生し、それが上方に伝わり、四国へも伝播した可能性がある。愛媛県での老年女性の使用例があり、高知県でも同じような例が認められる。
- 3 「ぜ」に同趣の告知機能を持つ「よ」が加えられ、相手に強く訴えかける機能を持つ「ぜよ」が生まれた。高知県に特有ではなく、過去の談話記録に他県の例がある。
- 4 「ぜよ」の待遇品位は、ほぼ同じ機能を持つ「ぞよ」に比べて低い傾向にある。古くは性差のない日常会話に用いられていたが、次第に男性語へ傾斜し現在に至っている。
- 5 広告・宣伝に多用される「ぜよ」は、土佐土着の幕末の志士たち、とりわけ坂本龍馬と緊密に結びついて県内・県外を問わず発信され、高い知名度を獲得している。

はじめに

2010年にNHKで放送された大河ドラマ『龍馬伝』には、龍馬が土佐勤王党の人斬り以藏に「おまんも武市さんに縛られることなく、己の生き方をしてえいと、わしは思うがぜよ。」と語る場面が出てくる。文末詞「ぜよ」はこの台詞に限らず、『龍馬伝』に登場する坂本龍馬を中心とした、幕末の土佐の志士たちの台詞の文末に頻繁に用いられ、あたかも、この時代の土佐を代表する土佐弁の代名詞のような役割を果たしている。

「ぜよ」と聞けば土佐、龍馬と言えば「ぜよ」、といった連想を生むほどに、台詞の最後に位置を占めた「ぜよ」が土佐を際立たせる。その効果は、中央政権にまつろわぬ鄙の地の威勢のよさであり、幕末のうねりから維新へ向かう、新しい可能性への牽引力の指向性でもある。

ドラマだけではない。現代社会に目を向ければ、高知県産品を売り込もうとする地元会社や店舗、区市町など公的機関の宣伝文句にもっとも多く使用されるのが、この「ぜよ」であり、人気の高い土佐弁の中でも、長く首位の座を譲らない。いったい、これはどうしてなのか。25年間、高知市で過ごし、高知県方言を観察しながらなかなか答えを出せないでいた、この問題について解決を試みる。

1 「ぜよ」はどのように用いられているか

土佐を舞台にした歴史小説などの文芸作品、映画・ドラマ・漫画など娯楽を目的とした創作物、商品販売を意図した宣伝文句、いわゆるキャッチコピーは、いずれも高知県方言を母語とする高知県出身者ないしは、何らかの形で制作にかかわった高知県にゆかりのある人々が作り出した言語作品である。研究対象として排除すべきではないが、創作という方法による、自然発話資料にはない作者が背後に存在する事実は見逃せない。たとえ、その作者が方言話者として信頼に足る資料提供者であっても、発話が作り出された事態であり、個々の言語事象が作者の内省というフィルターを一度ならず通過した、言い換えれば“創作という作為”が加わった言語現象であることを免れない。

研究の困難さは、実はこの点にある。耳から目から頻繁に飛び込んでくる、これら創作された「ぜよ」の使用例は枚挙に暇がないのに、高知県出身の話者がふだん話している方言会話のなかにはどうしたわけか姿を現さない。「ぜよ」は使いますか」と言って実際にはどのように使うのか、尋ねてみたいと思ったことはあるが、いまだに実行に移せないでいる。その理由は、上述した創作言語が日常生活の折節、一般の方言話者の脳裏に刷り込まれていて、実際の話しことばとは異なるあやまった内省のもとに説明されることを懼れるからである。

私が四半世紀の間に一度だけ耳にした自然発話のなかの「ぜよ」は、50歳台の男性のそれである。「やっと聞けた」という感動の方が大きく、不覚にも筆録できなかつた。居酒屋の暖簾をくぐりながら仲間の男性に気軽に話しかけた、短く断片的な発話であったことをおぼえているに過ぎない。

しかし、私の手元には、過去3年間に高知県出身の若者が自らの方言研究の途上で偶然にも捉え得た「ぜよ」の発話例がある。これまで高知大学で実習・演習・論文作成などを通して指導を行った学生諸氏3名が自分の耳で聞き、掬いとった貴重な実例である。

○ニチヨービニワ ヨーネ コーチノホーニモ イクゼヨ。イベントデ。(83歳女性)

(孫は)日曜日にはね、よくね、高知(市内)の方にも行くよ、イベントで。〈黒潮町〉

○ダイガク イッテ ナンノ エライサンニ ナルゼヨ。(88歳男性)

大学に行つて何の偉い人になるのか。〈黒潮町〉

○ドコニ トマリニ イッチョッタゼヨ。(70代男性)

どこに泊まりに行つていたのか。〈黒潮町〉

○チガウゼヨ。トンデキタガゼ コラー。(70代女性→79歳女性)

違うよ。(風に乗つて)飛んできたんだよ、これ(花)は。〈物部〉

○シランゼヨ。シランゾヨ。(79歳女性→20代女性)

(花の名前は)知らないよ。知らないよ。〈物部〉

○ハナワ ハナゼヨネ。コリヤー ハナガ サイチョーキ。(79歳女性→70代女性)

花は花だよ、これは。花が咲いているから。〈物部〉

話者は80~70代の男女で、学生たちの祖父母世代に当たる。黒潮町は高知市の西、旧物部村は高知市の東に位置する。少なくとも高知市から離れた地域で得られており、高知市の事例はない。今後とも「ぜよ」の発話例を求めていくつもりだが、現時点では以上の6例にとどまる。では、過去に記録された「ぜよ」はないのか、次に見てみたい。

2 「ぜよ」はどのように記録されているか

過去の言語資料として、次のような会話を録音し文字化した方言資料3種を調査したところ、「ぜよ」の発話例を見つけることができた。

①国立国語研究所『日本のふるさとことば集成』第17巻 2003.11.25 国書刊行会

②国立国語研究所『方言談話資料』(2) 1979 秀英出版

③日本放送協会編『全国方言資料』第5巻 1981.4.10 日本放送出版協会

①は1977年9月14日に高知市領家で収録された70歳女性と66歳男性の二人の会話である。それぞれの用例をまとめる。

《70歳女性→66歳男性》（「キ° カ° コ°」は「ギ ガ ゴ」が鼻音化していることを表す）

○オマサン ヤマカラ アレオ カタキ° ダイタカ° アリヤー ズルイ モンチャ ナカッ
タゼヨネー。おまえさん、山からあれを担ぎ出したが、あれはたやすいものではなかったよね。

○ソレオ オマサンー ナンゼヨ ソノアイダ コドモオ オーテ モリヨー シテ フトン
エ スカ° ッテ ネットーヨ。

それを、おまえさん、何だよ、その間子供をおぶって守りをしてふとんへすがって寝たよ。

○カゾクオ ヤシナウニオイテワ クローシタゼヨ。家族を養う[こと]においては苦勞したよ。

○マー ソレオ シッチョラニヤ イカンゼヨ ト ユーテ ホラ。

まあそれを知っていないといけないよと言って、ほら。

○ナンチャネー ナカナカ アノ シコ° トオ オモイダイテ ミリヤー ナトウカシユモ
アルゼヨ。 何だね、なかなかあの仕事を思い出してみれば懐かしくもあるよ。

《66歳男性→70歳女性》

○ンー ンマヨリ エラカッタ ト ユーゼヨ。うん馬よりすごかったというよ。

○タカー ウルサカッタゼヨ アリヤー。ほんとうにたいへんだったよ、あれは。

○ンデ ムカシワ ホンナ シンドー シチューゼヨ。それで昔はそんな苦勞をしているよ。

○マー トニカク ワコー オラニヤ イカンゼヨ トシバツカリ サンヨーシヨツトラ イ
カンゼヨ。まあとにかく若くないといけないよ 年ばかり数えていたらいけないよ。

○ナカナカ スット イカータゼヨ アレモ。なかなかすつとはいかなかったよ、あれも。

○ヒロゲテ ホイタゼヨ。広げて乾したよ。

○キル トキニー ナカナカ ヨーリヨーガ アツタゼヨ アリヤ。

切る時になかなか要領があったよ、あれは。

○アレモ ムツカシーゼヨ。あれも難しいよ。

②は昭和49~51年に南国市岡豊町滝本で収録された、老年男性（明29生）と老年女性（明31生）の会話である。この時、男性は78~80歳、女性は76~78歳と推定される。ここにはもう一人別の女性が同席しているが、「ぜよ」の発話は認められない。

○ヨー シーオ ヒロータ コトガ アル ゼヨ（老年女性→老年男女）

よく椎を拾ったことがあるよ。

○アソコエワ ドーイタチ イカレン ゼヨ（老年女性→老年男女）

あそこへはどうしても行ってはいけないよ（払い落とされるから、と言っていた）

○ソノウエオ オミコシサンガ コー カイテ トールヨーニ シテ ネー。ミンナー ソノ
シタエ モチコミヨッタ ゼヨ（老年男性→老年女性）

その上をおみこしさんがこうかついで通るようにしてねえ。皆その下へはいりこんでいたよ。

③は1956年1月22日に香美郡美良布で収録されたもので、老年男性(1883生、推定71歳)と中年女性(1903生、推定52歳)との間で場面を設定したロールプレイによる会話である。

○クワ オーキニ モドシテ キタゼヨ (老年男性→中年女性)

鎌をありがとう。返しに来たよ。

○コタナイゼヨ。(中年女性→老年男性) (そんなことは)ありませんよ。

○ココニ センバガ ミエルガー コリヤ ナンボゼヨ (老年男性→中年女性)

ここに十能があるがこれはいくらかね。

○イテ クルゼヨ。(老年男性→中年女性) 行ってくるよ。

○モオツテキタゼヨー (老年男性→中年女性) 帰って来たよ。

○ホリヤ タマラザッタノーシ ドーチャツタゼヨ シビガ ヨカツタカヨー (中年女性→老年男性) それは疲れたでしょうね。どうでしたか。首尾がよくいきましたか。

さらに、自由会話でも次の1例がある。

○ヤレタケンド ナカナカ ヒトリ フターリ デキル シゴトヂャ ナイゼヨ (中年女性→老年男性) やれたけれど なかなかひとりふたりでできる仕事ではないですよ。

①～③を通して得られた「ぜよ」の用例は全部で24例、うち1例は「ゼヨー」と長音化している。話者の内訳は男性14例(63～80歳)と女性7例(70～78歳)3例(52歳)である。1で見た学生の採録例では、男性2例(70～88歳)と女性4例(70～83歳)であり、1と2を合わせてみても16例と14例で、男性にやや多いものの、男女間の有意差は認めにくい。

3 「ぜよ」はどのように語られているか

自然の発話例が少ないため、これを補う手段として、人々の語りのなかに「ぜよ」が現れていないか、という観点から、いくつかの資料を繙いてみたい。民俗学で用いる聞き書きという方法で編まれた①『高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない』、②高知県の民話集4種、さらに、③高知県の教育関係者が編んだ小学校の副読本、④小学生の詩を集めた詩集、という、いずれも高知県人が郷土の言葉を多く用いて綴った作品群である。③を除けば、語り手の氏名がはっきりしている。「創作という作為」が加わった言語現象(1)ではあるが、自然発話に近い語りとして参照に値すると判断した。

①『高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない』

○縁談があった時、父が「水虫のことをいわれんぜよ」といった。(土佐市1921生)

- ある日、電車のなかでばったり同郷の知人に会い、「いま何をしゅうぜよ」という話から「パスガイドを募集しゅうが、やってみんかよ」という話になりました。(高知市1914生)
- 皆はその子の頭をなでては、「おまんは勤評の子ぜよ」といったものだ。(物部村1915生)
- 50歳のとき1級を取得し「県下でもよけはおらんぜよ」とほめられたときは、夜遅くまで学習した苦勞が報われたようでうれしかった。(香北町1919生)
- 就職した園生が「先生、来たぜよ」と訪ねてくれたり、「結婚したぜ」と報告してくれたときのよろこびはこのうえない。(香北町1919生)

「ぜよ」は全部で5例、発話者は父・同郷の知人・皆・園生などで、父以外の性別はわからない。

②高知県の民話集

(1)市原麟一郎『新編 日本の民話37 高知県』

「ろくさん物語」香美郡

◎ろくさんは、はたで見よった人に「ありゃ、なんぜよ」というて聞くと、「落馬じゃ」と教えてくれた。ろくさん(ちくくと脳ミソがたらん男)→はたで見よった人

◎「ありゃ、なんぜよ」「うん、郵便屋じゃ」ろくさん

◎「この赤いもんはなんぜよ」「ああ、稲荷の鳥居よ」ろくさん

◎「おんちゃん、あれはなにしゅうぜよ」ろくさん→おんちゃん

◎「あれはなんぜよ」と聞いたら「あれは赤牛じゃ」と教えてくれた。ろくさん

「カラカラ屋敷の長者」香美郡

○五時からカラカラあけはじめて、昼にちょっと一休みして、昼からもあけ続けて、あけてしまうのが晩方の五時ごろになるということで……六十人が一生けんめいにあけてぜよ。話し手

「離魂妖異譚」香美郡

○「寝入っちゃう間に、遊びにいちよった魂が切られて、よう戻らざったもんじゃ」と、評判になったというぜよ。話し手

「あの世へ行ってきた男」香美郡

○「まっこと不思議じゃ。片足をカンオケへ突っこんじよったぜよ」みんな→覚さん

「潮江山に狸がいなくなった話」高知市

◎「おまん、あしを化かそうち、そうはいかんぜよ。こらこら、こりゃなんぜよ」ぬのさん(油のあきないをする男)→狸

「えんこうの年貢」南国市

○「まあ、そういわんと、賃はうんとはずむぜよ」小坊主(えんこう)→役次

◎「作さん、なんちゅうて書いちよるぜよ」役次→隣りの作さん

「禱原のデコ廻し」高岡郡

○「ほんなら、ご馳走になりますぜよ」寅吉→おかみさん

「久米七の妖術」高岡郡

○「わしんくへ、久米七さんが来てのう、この傘と下駄をここな家へ返してくれいうて頼まれたきに、お返ししちよきますぜよ」藤の川の人→その家の人

「獅子がしら」高岡郡

○「かまんかよ。一旦、売ったら、戻しにきても返さんぜよ」古物屋→亀吉

「貧乏神退治」高岡郡

◎「ありゃ、おまん、いったい何もんぜよ」利太（百姓）→貧乏神

「喰い残し」幡多郡

○「梅ねえよ、ちつくと待とうぜ。あしや、今朝からなんちゃ食うてないがでよ。なんぼ、腹をこわいちゆうきいうても、もう腹がへってたまらんぜよ。頼むきカユでもたいちよいてくれんかよ」仁佐（お百姓）→兄嫁

○「いんにゃ、ちがうぜよ。あしや全部もたべちよりやせんやろがよ。ちゃあんとこのいぢよるはずでよ」仁佐（お百姓）→兄嫁

「庄七の忍術」幡多郡

○「それならおまん、さっき伊豆田の坂を、ブリ二本ひっかついで、行きよったぜよ」飛脚→みんな

○「おとやん、わしゃここにおるぜよ」庄七（若い衆）→親父

(2)松谷みよ子・桂井和雄・市原麟一郎『日本の伝説22 土佐の伝説』

「土佐物語」窪川

○「いったいどうしてここにおいでなさいませぬ、あなたさまがいなくなられてからは、ご両親のお嘆きはとても口ではいませぬ、奥方はご心労のあまりこの世を去られ、お殿さまもきょうあすの知れないお命、今からお供していきますきに、すんぐに志和へまでおもどりつかさいませ」次郎介（郎党）→殿様の息女

「珊瑚城」志和

●若者はぼつりというた。「ふたりでぬけ出すんじゃ」娘は仰天した。なんというてんぼう（無鉄砲）なことをいうぜよと息をのんだ。けんど、それしか道はないんじゃと、すぐうなずいた。そうじゃ、それしかない。 娘→若者

「安之丞の首」吾北村上八川

○若いうちはのうし、どうでも今が今やらねばならんと思いがちなものじゃけど、人間あせっては元も子も無うなるぜよ、ゆっくりとのうし、やった方があとあと無理が起きんぜよと折にふ

れていうちゃったそうなが～ 清兵衛（茶店のじい）→安之丞（若い庄屋）

- 「いなごにやられたぜよ」安之丞（若い庄屋）→清兵衛（茶店のじい）

「鯛舞兵助の嫁」竜串

- 「兵助さんよ、山には天狗がおつてうっかり入ると八つざきにあうぜよ。高い木にひっかけられたもんもおるぞ。それから城山の横吹峠には討死した城兵の怨霊が出よるき、暗うなつたら 通らん方がええぜよ」村のもん→鯛舞兵助（まだ若うて、優しげな侍）

「忍術つかいの茂平」日下村

- ◎「おかやん、どうしたぜよ」茂平→おかやん

(3)土佐教育研究会国語部編『高知のむかし話』

「ト トン トン トン ていていこぼしは おやどにか」高知市秦泉寺

- 「そりゃ、いかん。あの古寺は、化け寺ですきに、とまったりしたらおおごとですぜよ。夜中に化けもんが出てきて、食いころされるということですぜよ。」男→旅のぼうさん

「山んばのもち」高岡郡葉山村

- 「ぼんやりせんと、はようつけるようにせんかよ。むせたぜよ。」よめさん→清べえ
- 「おまさんくには、これからしあわせがやってくるぜよ。～」おばあさん→清べえ
- 「また、手つだわしてつかされや。今年もたのむぜよ。」おばあさん→ふうふ

「炭焼き長者」中村市奥鴨川

- 縁結びの神さんということぜよ。話し手（男性2名）

「人まねダヌキ」室戸市佐喜浜

- 「かねたのおんさんよう。さっきのは、ありゃあ、タノキのいたずらぜよ。～」おじやん同士
「尻切れ観音」室戸市元

- ◎「おばん、たいて大きなふくろもつちよるが、そりゃ、なんぜよ。」わかいし→ばあさん

「話ずきの次平さん」安芸郡田野町

- 「～きょうは、うそじゃというたらだんなの負けぜよ。～」次平→庄屋
○「そりゃあ、えろうのうて。土佐、二十四万石のとのさまぜよ。」庄屋→次平
○「そりゃあ、こがねづくりのかなたの二つや三つは持ちちよらいで。一国のとのさまぜよ。」
庄屋→次平

- 「～ひとこと、ひとことに相づちをうってくれんことにゃ、話しにくいぜよ。」次平→庄屋

- 「庄屋さんよ、もう八つじぶんじゃきに、荷おろしをいそぎますぜよ。」次平→庄屋

- 「～くろうなつたら山道はおとろしいぜよ。」庄屋→次平

「どうもこうも」土佐郡鏡村

- ◎「おまんとあしのうでがえいこたあ、そりゃあ、だれでもしつちよるが、どうぜよ。ひとつやつ

てみんなか。～」医者同士

◎「～こんなしいよいこたあおいちよいて、どうぞよ。こんだあ、～」医者同士

○たかあ、なんぼいうたち、たいてえなことぜよ。話し手

「桜多のウナギつり」土佐市市野々

◎「いくどころじゃない。しあえは何をしちよいたらええぜよ。」わかいし→おんちゃん

◎「えは何をもっていくぜよ。」わかいし→おんちゃん

◎「おんちゃん、えはどうさすぜよ。」わかいし→おんちゃん

◎「ミミズと、ドジョウとどっちがようくいつくぜよ。」わかいし→おんちゃん

○「おんちゃん、おまんが先にいたらつってしまうけに、こちゃ先に行くぜよ。」わかいし→おんちゃん

○「おんちゃん、浦の内にはひとつもウナギはおらんぜよ。」わかいし→おんちゃん

「津呂の千両ばこ」室戸市岬

◎「兄き、千両ばこはえい。もし、千両ばこをひろうたら、どんなに分けるぜよ。」弟→兄

「通り矢」南国市岡豊

○「そりゃちっとむごいぜよ。～」通り矢（力持ちの男）→役人

◎「おまん、しょうのみっぷりがええのう。もういっばいどうぞよ。」ばんとうさん→男

◎「二はいが悪けりゃ、三ばいはどうぜよ。」ばんとうさん→男

「おいせおまつ墓」東津野村

◎こんまいおいせになにができるぜよ。話し手

「おつまの話」香美郡野市町

○「あのこは、げにはたおりがうまいぜよ。」と、ひょうばんでもたったら、よい家がらのうちへよめにいけたそうな。話し手

●みんなあが、いろいろ話しゆううちに、夏の夜につきものの、おばけの話になったそうな。「あてい、火だまのとびゆうのを見たぜよ……。」村のむすめたち

○「よっしゃ、それじゃったら、一ばんええ反物をやるぜよ。」家元の主人→村のむすめたち

○「うそをいうかよ。まっことの話よ。穴まで行ったらまっことやるがぜよ。」家元の主人→おつま

「はたまが測」高岡郡佐川町

○「日がくれたら、だれぞに連れてきてもらいよ。そいて、はたまが測だけは通ったらいかんぜよ。ええか。」兵部（神官）→むすめ

◎「それじゃ、わしがご主人にかけおうちゃお、どこにおるぜよ。」兵部（神官）→むすめ

◎「子どもらあ、どこにおるぜよ。見てみたいが。」兵部（神官）→むすめ

「力もち久之丞」室戸市元

- ◎「おまん、わらうけんど、どうやってぬくぜよ。」人夫→久之丞
- 「そりゃ、ぬいてからにしいや。はなからそんなことをいよいよったらそんをするぜよ。」久之丞→人夫
- 「ほんなら、えんりよのう、もろうていくぜよ。」久之丞→人夫
「てっぽう作」高知市領家
- 「～ねんのためにむしおけへつなをつけちよくぜよ。」村の者→てっぽう作
「双名島の鬼」中土佐町久礼
- 海がまっことあおあおすんじよって、しょう、ええ所ぜよ。話し手
「くろがねのたま」安芸郡魚梁瀬
- くろがねの一発がなかったら、じいさんはどうなっちゃったか、考えても、まっぼがくらがる
話ぜよ。話し手
「かりうどの孫八」香美郡香北町
- ◎「どこへ行っちゃったがぜよ。」おとらあ→孫八
「えんこうのうで」安芸市柵ノ木
- とんとむかしの話ぜよ。話し手
- 「おんしもだれたねや、川であせを流いちゃるぜよ。」弥之助じいさん→馬のアオ
- 「あしゃあ、えんこうのうでを切ったぜよ。しょうまっことめずらしいきん、宝物にしようと思つてとこの間へかざっちゃあるぜよ。」弥之助じいさん→近所
「えんこうのねんぐ」南国市岡豊
- ◎「話によっちゃ聞かんこともないが、そら、なんぜよ。いっぺんいうてみいや。」磯次さん（若者）→えんこう
- 「～うかうかせられんぜよ。」知り合いの男→磯次さん（若者）
- (4)土佐教育研究会国語部編『高知の伝説』
「字賀の長者」高知市
- 「それでもやっぱし、どう言うたち、黒田の長者さまが土佐一番ぜよ。」百姓たち
- ◎「それにしても、えらいこともえよる。ありやいつごろからもえよるぜよ。」長者→茶屋のてい主
「市之丞と茂兵衛」高岡郡佐川町
- 「あんまりおそうならんうちにわしゃいぬるぜよ。」市之丞→茂兵衛（忍者同士）
- 「おかげさまでようぬくもった。そんなら、えんりよのう借っていくぜよ。」市之丞→茂兵衛
「お産土坊主」南国市

◎「福岡さんよ。おまさんのむすめをあしが見つけてかくもうちゃうが、おまさんはどうするぜよ。」郷土→城下の福岡家

「柏木の巻の測」安芸郡北川村

○「じつはのう、毎ばん毎ばん、秋葉さまのすがたがゆめのなかにあらわれる。なんだか、こちが悪うていかんぜよ。」おじさん→人々

「奴田のエノキ」長岡郡大豊町

○「やっぱりエノキさまは、ご神木じゃ。みょうにこち悪うなってきたぜよ。」村の衆→庄屋
「野鹿の池」長岡郡大豊町

○「そりゃ、みょうじゃのう。わしはけさから、あのおうかん（道）ぶちで仕事しよったけんどのう。そげえな、べっぴんは見かけざったぜよ。」村人の一人→ばあさん

以上、81例の「ぜよ」が数えられる。話者は男性が多くを占めるものの、5例(●)は明らかに女性で、娘・よめさん・おばあさん・むすめたちのことばである。さらに、疑問表現(◎)が27例で全体の3分の1を占める。疑問表現は民話の語りにおいては話を進める上での一つの手法とも考えられるが、「ぜよ」と疑問詞との共起性は高い傾向にある。次のように、「なんぜよ」7例「どうぜよ」4例「どう～ぜよ」4例を合わせると、疑問表現の半数を越える。

◎「ありゃ、なんぜよ」いうて聞くと、ろくさん→はたで見よった人（「ろくさん物語」）

◎「ありゃ、なんぜよ」（「ろくさん物語」）

◎「この赤いもんはなんぜよ」（「ろくさん物語」）

◎「あれはなんぜよ」（「ろくさん物語」）

◎「こらこら、こりゃなんぜよ」ぬのさん→狸（「潮江山に狸がいなくなった話」）

◎「おぼん、～そりゃ、なんぜよ。」わかいし→ばあさん（「尻切れ観音」）

◎「話によっちゃ聞かんこともないが、そら、なんぜよ。いっぺんいうてみいや。」磯次さん（若者）→えんこう（「えんこうのねんぐ」）

◎「～どうぜよ。ひとつやってみんか。～」医者同士（「どうもとこうも」）

◎「～こんなしいよいこたあおいちよいて、どうぜよ。～」医者同士（「どうもとこうも」）

◎「おまん、しょうのみつぶりがええのう。もういっばいどうぜよ。」ばんとうさん→男（「通り矢」）

◎「二はいが悪けりゃ、三はいはどうぜよ。」ばんとうさん→男（「通り矢」）

◎「～おまさんはどうするぜよ。」郷土→城下の福岡家（「お産土坊主」）

◎「おかやん、どうしたぜよ」「茂平、あれ、見てみい」（「忍術つかいの茂平」）

◎「おんちゃん、えはどうさすぜよ。」わかいし→おんちゃん（「桜多のウナギつり」）

◎「おまん、わらうけんど、どうやってぬくぜよ。」人夫→久之丞（「力もち久之丞」）

③高知縣市町村教育委員会連絡協議会『高知県人物読本 土佐の巨星』

- ・坂本さんにあうと負けじゃよ。ひとつお手やわからに頼みますぜよ。（弥太郎→龍馬）
- ・はるばる長崎まで来て、けんかするすることもないわにゃあ。なかようしょうぜや。（龍馬→弥太郎）
- ・友だちは友だち、借金は借金と、ちゃんとけじめはつけますぜよ。（弥太郎→龍馬）
- ・おまん、どこへ行きよるぜよ。（日根野弁治→龍馬）

坂本龍馬と岩崎弥太郎・日根野弁治（土佐における龍馬の剣の師匠）との会話に用いられている。男同士の会話で、しかも、「～ますぜよ」「～ませんぜよ」（弥太郎→龍馬）に対して、龍馬は「ぜよ」ではなく、「ぜや」で弥太郎に応じている。

④高知県児童詩研究会『やまもも』第8集

- ・あした内科検診か おらいやながぜよ 四年生がジロジロ見るもん それがいやながよ（入野小5年男児）

1984年時点で、小学5年生の、方言で書かれた詩の中に現れた「ぜよ」である。私の調査では子供の使用例はこの1例に限られる。貴重ではあるが、この詩集の性格上、ふだん使いの方言が飛び出したと考えられる一方で、「いやながぜよ」の後に反復するように「ぜ」を欠いた「いやながよ」が出てくる点を顧慮すると、大人の口調をまねたあと、あらためて自分の言い方でたたみかけたと考えることもできる。言い換え意識が働いた可能性が高い。

「ぜよ」の実例を補うための資料として、①～④を見た。いずれも高知県出身者による作品であった。さらに、⑤として、高知県外出身者による作品を見よう。

『まぐろ土佐船』の著者、斎藤健次氏は次のような来歴を持つ。

1947年東京生まれ。広告代理店勤務の後、編集プロダクションでの取材活動を機にフリーライターに。1976年、マグロ漁船に乗り込むために高知に赴き、3度の航海を経験。

この本は、遠洋航海のマグロ漁に従事する乗組員たちの日常を活写し、読者を船上に誘い出してしまう臨場感あふれる筆致に特徴がある。彼らの間に交わされることばは多くが土佐弁である。「ぜよ」の用例を拾ってみたところ、次のような16例が見つかった。

- ・かならずドアにカギを引っかけてから入らにゃいかんぜよ
- ・おまんも沖へ出たら、氣いつけないかんぜよ
- ・おらは上海掃りぜよ
- ・しわい（しつこい）サイクロンぜよ
- ・おうのう、退屈ねや。毎日食っちゃ寝、食っちゃ寝して、そう長くおれるもんじゃないぜよ

- ・野崎のお父さん曰く。「心、心ぜよ」。元船大工。
- ・何なこりゃあ、魚の団子ぜよ
- ・天ぶらはようこねないかんぜよ
- ・二十ペソのチップに替えてくれは、何ん言うがぜよ
- ・あれはもう張ったらいかんぜよ、ということぞ
- ・はほまいもここで、こじゃんと（たくさん）釣っちゃったきねゃあ。船員たちはたまらんぜよ
- ・わしは親分に期待しちよるぜよ
- ・コック長、今日の胴の間（甲板）やばかったぜよ
- ・もうちとばあ止めるがが遅れててみいや、大ごとぜよ
- ・あの暑さでおまん完全に死んじよったぜよ
- ・コック長、畳の上で寝るまでは氣い抜いたらいかんぜよ

「いかんぜよ」（傍線、筆者）が5例で相手に注意を促す時に用いられている。危険な船上での会話に似つかわしい。「ぜよ」以外の文末表現も多彩で、方言を縦横に織り込んだ会話が乗組員たちの生き生きとした働きぶりを彷彿とさせる。壮年の男性間の会話という点ではよく似た状況を示す、冒頭に紹介した大河ドラマ『龍馬伝』に見られたような「ぜよ」の過剰な使用はなく、他の方言会話も現在耳にする土佐弁とほぼ同じ雰囲気を感じ出して違和感がない。作為の加わらないルポルタージュとしてごく自然な体裁を整えた、読者に安心感を与える作品であり、高知県出身の精神科医・評論家の野田正彰氏が「これは体験記を超えた現代の漁民文学だ」と評した、第7回小学館ノンフィクション大賞受賞作でもある。

3の最後に、⑥として、伝聞や引用のなかで語られる例を見よう。次の3例である。

- ・アメリカエワ エライ モンゼヨ ～ ユーテイタ（63歳男性→66歳女性）

「米国（というところ）はえらいものだよ。～」と（おじさんが）言っていた。（幡多郡大方町前掲③1956.2.16）

- ・「とても優しい方で、3回しかすかんぜよと言いながら、私の撮影のために紙すきをしてくださいました」土佐和紙職人、浜田幸雄氏追悼記事の中の和田徳恵氏談（『高知新聞』2016.11.1）
- ・ジッサイニ ドーゼヨト ユー バイニ「実際にはどうか」という場合に（60代男性の発話2016.11.29）

それぞれ、県西部大方町（談話資料）・県中央部の町（新聞記事）・高知市（筆者聴録）で得られた例である。前2例はいずれも「そう聞いた」という引用部分に現れ、後1例は話者の仮定した問いかけに現れており、いずれも「ぜよ」は60代以上の男性の言葉遣いと捉えられる。

4 「ぜよ」はどのように生かされているか

今となっては1～3のどれよりもポピュラーな、広告・宣伝媒体に用いられた「ぜよ」を見ることにしよう。1～3がなかば自然発生的な使用であるのに対して、これは、利益を目途とした意図的な使用である。平成28年度2学期開講の「地域言語論Ⅱ」第1回で、すでに私が集めていた事例を示して受講生に収集作業を促したところ、約10日間で次のような成果がもたらされた。私の収集事例と合わせて76例が数えられる。これらをまず、①坂本龍馬に関するもの②それ以外、に分類する。

①坂本龍馬に関するもの 34例

- ・ZEYO（銀行のローン）龍馬像 ※
- ・土佐の夜が明けるぜよ！（メモ帳）龍馬の絵 ※
- ・土佐からの贈り物ぜよ（包装紙）龍馬の絵 ※
- ・おまんらあ、高知に来たら運転免許は「中央」でとらないかんぜよ!! 龍馬の絵
- ・龍馬その汗スッキリ拭ってほしいぜよ！（マフラータオル）龍馬の絵
- ・桂浜で遊ぶぜよ！（桂浜おすすめガイドパンフレット）龍馬像
- ・土佐へ来ちゅうぜよ!!（龍馬伝幕末志士社中 立て看板）龍馬の絵
- ・ぜよ（坂本龍馬記念館の缶バッジ）龍馬の顔スケッチ
- ・まあいっぺん食べてみいや。こじゃんと旨いぜよ！ 龍馬像
- ・もうすぐ開幕ぜよ！（日本スポーツマスターズ2012高知大会）龍馬像 広報香美
- ・うまいぜよ！（ちびりょうまくんベビーカステラ）龍馬の絵
- ・龍馬も気に入るぜよ！（ゆずのドリンク）高知
- ・雨でも夜でも楽しいぜよ！（るるぶFREE高知）龍馬&犬の散歩の絵
- ・一緒に写真を撮ろうぜヨ!!（龍馬立ち姿絵図）ひろめ市場 高知
- ・男たちの情熱の結晶ぜよ！（長崎造船所）長崎ガイドブック 龍馬の絵 ※ 長崎
- ・わしらが見上げた 長崎の空は広く広く、まっこと大きかったぜよ！ ※ 長崎
- ・土佐の心は太平洋 小さな事は色々あるが これを食べれば だいじょうぶぜよ。（チョコサンドクッキー）
- ・おまん そりゃ なんぜよ？（中岡慎太郎）こりゃ 塩けんぴぜよ。（坂本龍馬）二人の絵
- ・こじゃんとうまい やみつきぜよ！（芋けんぴ）龍馬の写真
- ・ようわかるぜよ！坂本龍馬（坂本龍馬入門書）京都
- ・路面電車にも乗れるぜよ（バスのルートマップ）龍馬の絵
- ・リョーマ「ジャクソン反対派の政党から奴隷制反対の共和党が54年にできたぜよ」
- ・リョーマ「大統領と対立したジェファソンの当選は選挙で政権が交代することを示したぜよ」

(『高知新聞』2016.9.30) リョーマくんの絵

- ・リョーマ「中国では国民が投票する選挙はないぜよ」(『高知新聞』2016.4.29)
- ・がん検診 受けなあ いかんぜよ (がん検診で健康維新!!) 龍馬の絵
- ・うまいもん揃えたぜよ (スーパーちらし) 龍馬の絵
- ・こじゃんとうまいぜよ (土佐文旦ようかん) 龍馬の絵
- ・ハーフセットができたぜよ。(土佐の塩たたき おらんくたたき) 龍馬の絵
- ・革命の志士 変わらにゃいかんぜよ! (龍馬疾風録チョコローフパイ) 龍馬の絵
- ・これが本当の「リョーマの休日」ぜよ (龍馬の生まれたまち記念館) 龍馬の絵
- ・らぶ&びーすで、薩長同盟ぜよ! (龍馬の生まれたまち記念館) 龍馬を含む三人の絵
- ・日本はいまどうなりゆうがぜよ (龍馬の生まれたまち記念館)
- ・たまるか アメリカの蒸気船ぜよ (龍馬の生まれたまち記念館)
- ・高知へようきたのう、こじゃんとえいところぜよ。ゆっくり見とうせや。(高知駅付近の建物)

これらは今回収集分全体の半数近くを占め、坂本龍馬と「ぜよ」との強い相関が証明された。しかも、龍馬の写真や絵などの併用がほとんどで、文字と画像との相乗効果が期待されている。実際はどのようなものがわかるように、※を付したものを17ページに掲げる。

②坂本龍馬以外 42例

- ・世界はひろいぜよ!! (土佐学問帳) カツオ人間
- ・なめたらいかんぜよ (タオルハンカチ) カツオ人間
- ・めんたま飛び出るほど驚くぜよ 高知カツオ人間。(ストラップ)
- ・カツオ人間ゼヨ 元気になるゼヨ (滋養強壮ドリンク)
- ・カツオ人間扇子ぜよ! (扇子)
- ・ぜよ! (だよ) (土佐弁キャラクタークッキー)
- ・こじゃんとうまいキリッと辛口 やっぱりアサヒのスーパードライぜよ!
- ・たっすいがは、いかん! やっぱり高知はラガーぜよ。(ビール)
- ・うまいぜよ (高知県)
- ・こじゃんと美味しいクッキーぜよ! (土佐弁キャラクタークッキー)
- ・活のえい齶を茶漬にしたぜよ まっことうまいき 食べとうせ (お茶漬け)
- ・土佐うまいぜよ (文旦ゴーフレット)
- ・高知の生姜でぬくもるぜよ (どっさり野菜ドレッシング)
- ・土佐のしょうがぜよ (生姜豆)
- ・いごっそう 麦ぜよ とても優しい「いごっそう」ぜよ (麦焼酎)

- ・天ぶらがまっことうまい タタキがおいしいちや 生ビールでどうぜよ (居酒屋)
- ・この日に「中日そば」を食べたら御利益があるかもしれんぜよ。(中日そば保存会)
- ・まちの歴史ガイドや塩の道の案内人を紹介するぜよ。(中日そば保存会)
- ・うまいぜよ、 高知米 ??食べとうせ (JAグループ高知)
- ・簡単にできるぜよ (『県政だより さんSUN高知』2016年2月号農業特集)
- ・おまんらあ こじゃんと ふとい夢みな いかんぜよ (Tシャツ)
- ・人生山あり谷ありぜよ けんどてっぺん登るぜよ (Tシャツ)
- ・通販もあるぜよ! (ひろめ市場)
- ・今、土佐弁が面白いぜよ!
- ・土佐弁でしゃべるぜよ!! (高知県内ファミリーマートのインターネットATM)
- ・ZEYOぜよ (高知のWEBメディア)
- ・ぜよっ! (宮尾知明 音楽CDジャケット)
- ・改修にかかる費用には補助も出るぜよ (高知県)
- ・こんな時に! お住まいの救急隊ぜよ (タウンページ リフォーム会社)
- ・県をあげて高知グルメの魅力を伝えるぜよっ (土佐おもてなし勤王党)
- ・ここにあるぜよ! (龍河洞展示)
- ・恋文〜おまんが好きぜよ (ラジオドラマ)
- ・その時、できることがあるぜよ。(高知地方気象台パンフレット)
- ・如月祭の夜明けぜよ!! (高校文化祭)
- ・嫌な奴を殺しても自由は殺せんぜよ (板垣退助)『とさぶし』第10号 ※
- ・金の亡者はいかんが目的のために儲けるがは必要ぜよ (岩崎弥太郎)『とさぶし』第10号 ※
- ・会社を首になっても筆一本でできるぜよ (絵金)『とさぶし』第10号 ※
- ・高知の雨は舐めちゃいかんぜよ… (高知大学大学生協)
- ・ちっとええぜよ汗見川 (本山町)
- ・なにを言ひよるがぜよ (村岡マサヒロ『きんこん土佐日記』2010.1.12)
- ・間違い電話はいかんぜよ〜 (村岡マサヒロ『きんこん土佐日記』2010.1.14)
- ・太平洋の向こうと、大学の向こうに、未来は広がってるぜよ。(路面電車広告)

5例を数えた「カツオ人間」とは、現在全国で流行しているご当地キャラクターの一つで、高知県生まれのマスコットキャラクターである。「カツオ」のぶつ切り頭と、人間を合わせたキャラクターで「キモカワ」(気持ち悪いがかわいい)キャラとして活躍中というが、知名度はさほど高くなく、龍馬に及ばない。高知県文化生活部文化推進課が発行している『とさぶし』第10号では、※を付した龍馬以外の著名人3人のことばに「ぜ



(高知県内企業の広告・宣伝)



(長崎デスティネーションキャンペーンガイドブック2016.10.1▶12.31 JR-GROUP)



(『とさぶし』第10号 高知県文化生活部文化推進課)

よ」が出てくる。実際の絵を17ページに掲げる。

図からは、高知県は龍馬以外（第10号には龍馬は登場しない）の高知県出身者、絵金（江戸時代の絵師金蔵）・岩崎弥太郎・板垣退助にも「ぜよ」を喋らせることによって、龍馬だけではない高知県の偉人をアピールしたいという狙いが読み取れる。県として、それはごく自然な欲求であるが、しかし、高知県を出てしまうと、おそらくかなり困難な状況が待ち受けている。JRグループがこの秋に企画した『長崎デスティネーションキャンペーンガイドブック』には、龍馬と弥太郎の二人が描かれたカットの吹き出しで龍馬のみが「男たちの情熱の結晶ぜよ！」と叫び、弥太郎には何もなく、それを補完するような「龍馬と弥太郎」の説明が加えられている。同時代に活躍した土佐の傑物でありながら、違う待遇を受けているのである。他県での発行物であり、「ぜよ」と龍馬との関係が意識されるあまり、弥太郎には「ぜよ」が使われていないのかもしれない。次のような龍馬の長い語りとは対照的である。

わしが仲間と歩いた道は、どこも急な坂道じゃった。けんど、歩きながら語る日本の未来は明るく、希望に燃えちよった。わしらが見上げた長崎の空は広く広く、まっこと大きかったぜよ！

ここには、強い個性を持つ龍馬に託して宣伝効果を拡大しようとする発信者の意図が読み取れる。その最も手っ取り早い手段が龍馬の「ぜよ」使用なのであろう。ちなみに、長崎観光推進を目的に発行されたこのガイドブックに使われた長崎方言は10年前に開催された「さるく博」を承けた「さるこう（歩きまわろう）」1例だけで、ご当地方言使用とのふつりあいからも「ぜよ」の使用が特別な印象を与えるのは明白である。

「ぜよ」を含む、漫画やドラマに用いられる土佐弁の特徴的な言い回しをとくに「龍馬語」と呼ぶ人たちがいる。渡辺瑠海『龍馬語がゆく』（2006）や田中ゆかり『方言コスプレの時代』（2011）には「龍馬語」の事例分析がなされていて参考になる。「ぜよ」については、渡辺（2006）が次のように説明する。

だいたいにおいて「ぜよ [zejo]」は、男言葉だ。もし、女言葉で言うとしたら「なめたらいかんでえ」になるだろうが、なんだかしまりがない。どちらにしても、日常生活では、あまり近寄りたくない言葉である。（「なめたらいかんぜよ」）

「ぜよ」の待遇品位についての言及もあるので、5・6で整理する。こうした「ぜよ」を含む「龍馬語」に対して、田中（2011）は、その誕生の背景を次のように分析してみせた。

「組織におさまりきれない個性を持った存在」である「龍馬」の作品中での「成長」にしたがい、司馬遼太郎が「方言」を与えていったのは、意図的かどうかはともかく、新しいヒーロー像を確立する一つの方策となったとみていいだろう。「方言ヒーロー・龍馬」の「成長」

と確立は、「方言」を「個性」とみる時代の気分の先取りであったと捉えてもいいだろう。(中略)

この「方言」を与えられた新しいヒーロー「龍馬」には、「共通語」と「方言」のバイリンガル話者となりつつあった高度経済成長期の上京青年たちだけでなく、大学進学率の高まりとともに急増していた各地の大学浪人生などが自己を重ねただろうことが想像される。ある意味、時代が求めた新しいヒーロー像が凝縮された結果が「方言キャラ・龍馬」だといえるかもしれない。(「戦中・戦後の龍馬物にみる「方言」)

「龍馬語」は土佐弁という地域の枠を跳びこえて、使用され理解される言語である。したがって、他の土地で発行された宣伝物に、「龍馬語」と化した「ぜよ」が出てくることはむしろ必然と言える。

このほかに、広告と宣伝の全体にわたって見られる大きな特徴がある。視覚的効果を狙ったものと言えるが、あたかもそれを音声化するような記号の乱発である。エクスクラメーションマーク「！」が付された例が29例(龍馬17、龍馬以外12)で、龍馬に「！」の過半数が添えられている。しかも、このうち5例は「!!」(龍馬3、龍馬以外2)のように二つ重ねた強調形である。また、「ぜよっ」のようにわざわざ促音を添加したもの2例(龍馬)、このうち1例はエクスクラメーションマークと併用する。びっくりマークという別名があるように、話し言葉で驚かせて注意を引こうという意図があからさまに伝わってくる。今回の収集例だけでは速断できないが、龍馬と「ぜよ」と「！」の三者の結びつきはかなり強いと言ってもよい。

5 「ぜよ」はどのように説明されているか

「ぜよ」は、これまで先行文献ではどのように説明されているか、見ていきたい。吉田則夫「高知県の方言」(1982)には、次のような記述があるものの、具体例は示されていない。

文末助詞については、県下全域に行われているものの中で、とくに、ノーシ・ネヤ・ゾネ・ゼヨ・チャなどが土佐方言らしいものとして耳に留まるものであろう。

次に、方言辞典を古いものから見てみよう。

①土井八枝『土佐の方言』

……**ぜよ** ……ぞよ。(ぞよより下品な語)「これを貰うていくぜよ。」

一、お前達は六時前に起きなけりゃいけないよ。おまんら一六時前に起きにゃーいかんぜよ。(或はぞよ) 標準口語と土佐方言との対照(東條操先生の「比較方言研究資料短文」によりて)

七、お医者様に早く見て貰うが（或はたら）え、ぜよ。

②宮地美彦『土佐方言集』

なんぜよ なんぞよ 何デスカ？（安芸郡、香美郡、長岡郡）

「こりゃなんぜよ（なんぞよ）？」「なんぜよ（なんぞよ）？用があるかよ？」

あんまりぜよ（余りぜよ）あんまりぞよニ同ジ。程ヲ過ギテ居ルゾヨ（ゼヨ）ノ意。法外
ダゾヨ、アマリゾヨ。「お前さんらはあんまりぜよ、（後略）」

①と②は昭和10年代初頭に相次いで出版された方言集であり、土佐方言の昭和初めころまでの姿をとどめた貴重な文献である。①は「ぜよ」を「ぞよ」と比較対照し、待遇品位の低さを指摘している。一方、②は「なんぜよ なんぞよ」のように並列させ、「ぜよ」と「ぞよ」を全く同格として扱い、別項「あんまりぜよ」でも同じように説明する。試みに方言集全ページにわたって見出語の文例に用いられた「ぜよ」と「ぞよ」を調査すると、用例数は1：5で「ぜよ」よりも「ぞよ」が多い。「ぜよ」は次のような文例に用いられている。（ ）に見出語を示す。

- ・此の接木ならいっきに果実がなりますぜよ（いっきに）
- ・この方言は一つ書き落して居ったきに、どこえでもはざけるぜよ（はざける）
- ・あの女ははちきんぜよ（はちきん）
- ・あほ一ぢゃと思一てほがすもんぢゃないぜよ（ほがす）
- ・之はなげですからほんとにお安う御座いますぜよ（なげ）
- ・此頃はえごえ引こんで居るきに、訪ねて来てもなか／＼わからんぜよ（えご）
- ・あいも行くぜよ（あい）
- ・何事ぢゃ一ったぜよ（さかとんぼをうつ）
- ・今日はめいぎらんづつにやろ一ぜよ（めいぎらんづつ）
- ・も一じゃん（おじゃん） ぢゃ、明日又やろ一ぜよ（じゃん）
- ・あの選手の走る所を見たかよ、しょーものすごかったぜよ（ものすごい）
- ・あの話をこゝまで進めるにはぜったいこいたぜよ（ぜったいこいた）
- ・お負けして之ば一すてめを入れちよきますぜよ（すてめ）

①では「ぞよより下品な語」と説明された「ぜよ」だが、②の「～ますぜよ」3例に、3③「～ますぜよ」「～ませんぜよ」（弥太郎→龍馬）を考え合わせると、品位はそれほど低くない。しかし、②で「ぞよ」の文例が「ぜよ」の5倍の多さであること、1で見た実例、「○シランゼヨ。シランゾヨ。（79歳女性→20代女性）」の「ゼヨ」から「ゾヨ」への言い換えは、「ぜよ」よりも「ぞよ」の方が品の上ではいくぶん優るといふ意識の表れとも考えられる。その「ぞよ」は、時代を遡ると、幕末、坂本龍馬が土佐の姉に宛て

た手紙の中（傍線、筆者）に出てくる。

- ・此状もつて行者ニ、せんの大廻の荷のやり所がしれん言ハれんぞよ（安政5年7月頃か）
- ・此手紙人にはけしてく見せられんぞよ（文久3年6月28日）
- ・せひよまねはいかんぞよ おもしろやくをかしやく（文久3年6月29日）
- ・それハくおそろしいめを見るぞよ（文久3年6月29日）
- ・此は(な)しハまづく人にゆハれんぞよ すこしわけがある（文久3年8月14日）

龍馬が「耳許に口を寄せるように土佐言葉で姉に呼びかけている」（宮地佐一郎『龍馬の手紙』）、その言葉は「ぜよ」ではなく「ぞよ」で結ばれており、家族に宛てた口語調の書簡には、龍馬が「ぜよ」を使用した形跡は見当たらない。また、龍馬と同時代を生きた土佐勤王党の盟首、武市半平太（瑞山）には獄中から姉や妻に宛てた約百五十通の書簡（傍線、筆者）が残されており、その中で「ぞよ」は、次のように用いられている。

扨、春ニなり、けしからぬあたゝかなる事にて候。暮には、喜太次参りて、いかんかなどゝ、ねんころニすゝめ候よし。誠にく、そんなしなげもなき事ニて、婦人のくることハ決してせられん。よふこそごつた。誠に、女房がひそかにあいにいたげなどゝ、万々しれたれハ、後の世までのはぢにて候。あいたい事はいわいでもしれたことなれど、これハさつはり思ひきり可申候。誠にく、やすからんことぞよ。喜太次などハあのよふな人ゆへ、あとさきのかんがへもなく、たゝくねんころのあまりニそのよふなことをいうてゝ、めても、決していかんぞよ。申までもなく候へとも、ねんのため、くれく申進候。（慶應元年1月2日）

妻に会いたい感情を必死に抑え、二人を会わせようとする喜太次の計らいを「やすからんことぞよ」（けしからんことだよ）「決していかんぞよ」（決してく誘いに）乗ってはいけないよ」と瑞山が妻にたしなめているくだりである。文体には龍馬とは異なる瑞山の個性が表れていても、用いた「ぞよ」は龍馬が姉に宛てて用いた「ぞよ」と同じ用法である。書簡数が多いため、「ぞよ」の使用例は全14例で、龍馬の書簡を上回る。しかし、慶應元年1月2日以降は1例にとどまる。14例中10例は文久3年9月から1年8カ月後の切腹死までの前半で用いられており、後半での「ぞよ」使用は少なくなる。口語的な表現「ぞよ」はまだ気持ちの上でゆとりのあるとき、獄中から愛しい妻へ語りかけるようにしたためられた書状で用いられたと言えるのかもしれない。なお、「ぜよ」は龍馬の手紙同様、一度も用いられていない。

③土居重俊・浜田数義『高知県方言辞典』

ぜや ㊦ …よ。…ね。「あの馬はしょー早いぜヤ」「金が安けりゃ、旅行の組に入れてもらおーぜヤ」（注）「立派なぜヤ」「正直なぜヤ」などと形容動詞の連体形にもつく。

ぜよ ㊦ …よ。…さ。「さー行くぜヨ」「そんなことは知らんぜヨ」「あの人は正直なぜヨ」

「ぜよ」の前に「ぜや」があり、共通語に直せば、「ぜよ」は「よ」「さ」であるのに対して、「ぜや」は「よ」「ね」であるとする。「ぜよ」の方が少し軽いということであろう。すでに、「ぜや」は3③『高知県人物読本 土佐の巨星』で龍馬の弥太郎への言葉遣いに現れていた。②の民話にも次のように出てくる。

○「大けな音じゃねや。こっちの耳からこっちの耳へ抜けたぜや」山父→殺生人
（「殺生人と山父高岡郡」高岡郡）

○「よしよし、はいっちょろうぜや。傘と下駄を貸してくれりゃ入ってみせらあ」久米七→ばくろう（「久米七の妖術」高岡郡）

○「一口は耳までさけて、わしらあ五体じゅうの血がさかしに流れたように思うたぜや。～」若いし（「岩井のおかねさん」土佐清水市）

「ぜや」は「ぜよ」に酷似してはいるが、使用頻度においては「ぜよ」に及ばない。

④藤原与一『日本方言辞書』

ゼヨ 文末「何々だ ぜ。」（何々だよ。）などのぜとヤ行音文末詞ヨとの複合形 ○高知県下にこれがよく聞かれる。 県中部：これから イク ゼよ。（これから行くわよ。中女→したい人に。）[中略] 高知県つづきの愛媛県西南部域にもゼヨがある。—『南宇和方言の性格』：この子はさどい子ぜよ ところで、中部地方のうちにもゼヨがある。

「ぜよ」が「ぜ」と「よ」の複合したものであるという説である。確かに、「よ」を欠いた「ぜ」の用法は高知・愛媛両県ともにある。県別に用例を挙げる。

[高知県]（学生の自然会話記録・『日本のふるさとことば集成』・『全国方言資料』・児童詩・『ひとくちに話せる人生じゃあない』・民話・『まぐる土佐船』）

○ソннаコト シタラ イカンゼ 10代女性→10代男性

そんなことをしたらいけないよ。〈室戸市〉

○アンタラ ドンナホン ヨムゼ 70代男性→20代女性

あなたたちはどんな本を読むの。〈赤岡町〉

○ジマンズルトコロジャーテ マッコト ナイゼー 60代男性→20代女性

自慢するところなんて、本当はないよ。〈赤岡町〉

○ネコ イレタラ ナンニンゼ 60代男性→22歳女性

猫を（家族に）入れたら何人か。〈土佐山田〉

○アオイウチカラ タベユーゼ 60代男性→22歳女性

（柿がまだ）青いうちから食べているよ。〈土佐山田〉

○ドーモ ソーカモシレンゼ 79歳女性 どうもそうかもしれないよ。〈物部〉

- エサオ カゾエルダケデモ タイシタモンゼニャー 60代男性→22歳女性
えさ(の数)を数えるだけでもたいしたものだよ。〈土佐山田〉
- ソレワ キレーナゼ。66歳男性→70歳女性 それはきれいだよ。
- ソー ソンデ ヤスカッタ ト ユーゼ アリヤ。66歳男性→70歳女性
うん、それで安かったといったよ、あれは。
- エライ オソーナツタケン モー ワシャー イヌルゼ 55歳男性→63歳女性
ずいぶんおそくなったから、もうわたしは帰るよ。
- アンマリ ヘヨリ シヨッチャ イカンゼー ハヨー モドラニャー 63歳女性→55歳男性
あんまり道草をくっついてはいけませんよ。はやく帰らなくては。
- みんなわらったけどぼくはわらわなかったぜでも先生あんまりむりせられんぜ(奈半利小
2年男児)
- ただで乗れてよかったね。けしきもええろう。勉強もせんといかんぜ。(打井川小6年男児)
- 先生 二十三歳ばあに見えるぜ(須崎小2年男児)
- 先生が算数病院はきびしいぜっという(久礼田小3年女児)
- 朝になると「また会おうぜ」と言って別れた。(佐川町1922生)
- 主人に「子どもができて勉強したいいうたら、男でも女でも、どんなにしても、石にかじりつ
いてでも、ご飯を食べんとでも学校へ行かしちやろうぜ」と言った。(大方町1916生)
- 「先生、来てぜよ」と訪ねてくれたり、「結婚したぜ」と報告してくれた(香北町1919生)
- 姪から「姉さんの行く所は遠いがぜ」ということだけ聞いていた。(西土佐村1916生)
- 「あれかよ、ありゃ風呂にくべたぜ」ろくさん→坊さん「ろくさん物語」
- 「おお、やってみようぜ。山父が先にやれ」殺生人(獵師)→山父「殺生人と山父」
- 「おとう、おかあ。わしゃあもう、うちへ帰るこたあできんぜ。こんなかっこうになつても
うたけん。」お藤(寺子屋)→両親「藤がとどろ」
- 「もうちつと休んでやろうぜの。」連れ→てっぽう作「てっぽう作」
- 「えっ、ただじゃすまん。そりゃ、どういことぜ」役次→隣りの作さん「えんこうの年貢」
- 「ほんなら、今からいくぜ、おとやんも達者でう」庄七(若い衆)→親父「庄七の忍術」
- 「～おら、きょうは一日、ねよるぜ。」弟→兄「津呂の千両ばこ」
- ・みな領海内に入ってやりゆうぜ(『まぐろ土佐船』)
- ・長やん、野菜来ちゆうぜ(『まぐろ土佐船』)
- ・また人を落としたらしいぜ(『まぐろ土佐船』)

以上のように、自然会話・児童詩・聞き書き・民話に散見され、子供から老人まで、しかも、男女を問わず使用されていることがわかる。

[愛媛県]

松山市と喜多郡内子町の例をあげる。

・松山市（国立国語研究所『日本のふるさとことば集』1981年9月1日収録）

○モー ソコー ウゴカレンゼー ユーテ 78歳男性→67歳女性

もうそこを動いてはいけないぞ [と] 言ったものだから

○カミソモ ホヤケド ナガカッタゼ アレ。67歳女性→78歳男性

コウゾもそうだけれど長かったよ あれ。

○ウン アレワーノー オハンニヤサンワー チガウゼー 67歳女性→78歳男性

うん、あれはね、お般若さんは違うよ。

・内子町（小川萌乃『愛媛県喜多郡内子町の方言文末詞』2015）

○ナイテ カエリヨッタ ゼ。<80女→20女>泣いて帰っていたよ。

○ウチコユータラ ナン ゼー？ クリマンカー。<80代男→22女>

内子と言ったら（名物は）何よ？ 栗饅か。

○ワタシラワ ソガイニ イカンケン イーン ゼ。<60代女→60代女>

私らはそんなに行かないからいいのよ。

○ウチコザナンカモ ソー ゼー。ショーコーカインノ モノオキニ ナットツタンジャケン
ナ。<70代男→22女>内子座なんかもそうよ。商工会の物置になっていたのだからね。

○ジモトノヒトガ ネ ココワ エートコ ゼー ナンテ ワリアイ イエン ノヨ。

<70代男→22女>地元の人がね、「ここはいいとこよ。」なんてわりあい言えないのよ。

○ボクラニ イワシタラ ゼ コーチノ シマントノ アユワ ナ キンアユ ユーケド マ
リニ ミズガ キレスギテ アユガ オイシクナイ ユー ノヨ。<70代男→22女>

僕らに言わせたらよ、高知の四万十川の鮎はね金鮎というけどあまりに水がきれいすぎて、ア
ユが美味しくないというのよ。

○ミジカイヒトヤッタラ デキヘン ゼ。<54女→22女>（指が）短い人だったらできないよ。

小川（2015）は多くの50～80代男女の発話例をあげて、次のように指摘する。

「ぜ」はもともと押しの強いところがある。藤原与一（1985）によると、「ぜ」は男言葉であり、上品な言いかたにはならないと述べている。今回の調査では、親しい間柄でのみ用いられ、女性の使用が多くみられた。

そして、

江戸で女性が「ぜ」を使用していた例として、『浮世風呂』には、「ア、ごうぎと男湯が騒
ぐしいぜ。」と女性が話している場面がある。明治以降、西日本では「ぜ」が「デ」に変化し
ているが、今回得た用例から見ると、内子町においては、江戸の「ぜ」がそのままの形で引

き継がれており、男性語化は認められない。

と見て、次のように結論づけている。

- ・内子町では女性の使用が男性の2倍もあるため、「ゼ」が男性語化しているとは言えない。
- ・明治以降、西日本では「ゼ」が「デ」に変化している地域がある中、内子町では形が変わることなく「ゼ」のままで残っている。

6 「ぜよ」はどこから来たか

さて、「ぜよ」の由来・出自に関する情報が次第に集まってきたところで、つまるどころ、「ぜよ」はどこから来たのか、解決を試みよう。5で見た藤原与一『日本方言辞書』は、「ぜよ」が高知県と西に隣接する愛媛県南宇和にもあること、さらに、次のように、遠く離れた中部地方にもあることを指摘している。話者は1902年生まれで、収録当時54～55歳と推定される。

オイ カエツテキタゼヨ(おい、帰って来たよ。) スジャ イツテクルゼオ(じゃ行って来るよ。) 長野県更科郡大岡村芦の尻 (『全国方言資料』第2巻 1957年8月4日収録)

希少例であり、ゼヨばかりか、ゼオの発音も記録されていることがわかる。「ぜ」の発生が江戸であれば、その周辺部に「ぜよ」があってもおかしくない。『江戸語大辞典』によれば、

ぜ 「ぞえ」の訛形「ぜえ」の短呼。命令・禁止・疑問文以外の文末に付け、自己の立言を相手に通告し、その注意を喚起する気持を表わす終助詞。明和八年・両国栞「こんやもいねエゼ」安永四年・青楼楽種「あすいかうぜ」(『江戸語大辞典』)

とあり、1771年と1775年の使用例を示している。「命令・禁止・疑問文以外の文末」に限定されたようである。さらに、『近世上方語辞典』によれば、「ぜえ」は、

ぜえ 「ぞえ」の訛。活用語の終止形につき、自分の言うことを相手(親しい人)に告げ知らせる気持を表わす。天明前後から現われ、幕末に至る。短呼して「ぜ」というのが普通。長呼・短呼ともに江戸語の移入か。天明四年・隅田川統佛「よう呑みたがるぜえ」(『近世上方語辞典』)

として、江戸より10年あまり後の使用例を挙げている。また、「ぜ」については、

ぜ 「ぜえ」の短呼。現代に入って「で」と訛る。[中略]「大坂にて、わるいぜ、江戸にて、いけないよ」(『近世上方語辞典』)

のように、「で」への変化にも言及している。

上方語の伝播はきわめて自然に四国へ展開したことになる。徳島県は「デー」の格別盛んな地域であり、同じく、高知・愛媛県でも使用される。県ごとに見てみよう。

[高知県] (学生の自然会話記録・『日本のふるさとことば集成』・民話・『まぐろ土佐船』)

- ゼッタイ タベヤスイデ 30代男性→小学生男児 絶対食べやすいよ。〈赤岡町〉
- ヨマナイカナンデ ホンオ 70代男性→20代女性 読まないといけないよ、本を。〈赤岡町〉
- ホントニ ワカランデー 80代男性→20代女性 本当にわからないよ。〈赤岡町〉
- イガイト リコイガデ 40代男性→21歳女性 意外に利口なんだよ。〈土佐山田〉
- 「けんとおまん、たったのこっばあ、なんで残すでよ。ついでになんであと一口たべんかったがでよ。」 兄嫁→仁佐 (お百姓) 「喰い残し」
- ・動物虐待で罰金とられるで (『まぐろ土佐船』)
- ・こんなところやき、まじめにやらないかんで (『まぐろ土佐船』)
- ・食べよ、食わないかんで (『まぐろ土佐船』)
- ・せっかく陸に入っても船にいる人おるけんども、もったいない思うがで (『まぐろ土佐船』)
- ・食べた後、正露丸飲んで胴の間 (甲板) へ行きゆうがで (『まぐろ土佐船』)
- ・女房が娘にわしの写真をぎっちり見せよったというがで (『まぐろ土佐船』)
- ・みよってん。そんなことばっかり言いよったら、今に怪我するで (『まぐろ土佐船』)
- ・おまん、こりゃあ夜が明けるで (『まぐろ土佐船』)
- ・わしも漁師をやめたことがあったがで (『まぐろ土佐船』)

[徳島県] (上野智子「阿波方言の文末詞デ(一)」)

- アリヤー ホー デー。あら、そうですか。老女→老男
- モー ショーヒンガ デン デー。もう商品が出ませんねえ。老男→老女
- イエニ オル ホーガ エー デ。シゴトガ アル デー。家に居る方がいいですよ。仕事がありますよ。中女→老女
- トカイデヤ ミナ イッピキ ナンポー ユーテ ウンリョル デーナー。
都会ではみな、(兜虫を) 一匹いくらと言って売っていますねえ。老女→老男
- ウチノ イヌワ オトナシー イヌ デヨー。オマハンクノ マゴガ イシデモ ブツケタンダロ デガー。うちの犬はおとなしい犬ですよ。あなたの家の孫が石でもぶつけたんでしょうが。中女→老男

[愛媛県] (前3例は小川萌乃(2015)内子町、後1例は国立国語研究所(2003)松山市)

- オーキサモ イロイロ アルデ ネー? <54女→84女>大きさもいろいろあるよねえ?
- イセービヤツラ アレ ハシカノトキニ アレシタラ エーンデ ネ。<83男→22女>
伊勢海老だったら、あれ、麻疹になった時に、あれ<殻を粉末にした薬>にしたらいいのよね。
- ヨー ユ ワイ ロクガ ハイットッタデ。<83男→84女>
よく言うよ、録画は入っていたよ。

○イマゴロ クサ トリヨットンデ。78歳男性→67歳女性 今頃草 [を] とっていたのだよ。

『近世上方語辞典』の「現代に入って「で」と訛る」という「ぜ」の展開が徳島県ではほぼ達成されて「ぜ」は聞かれなくなったものの、愛媛県・高知県では江戸語から移入した上方語「ぜ」が男女ともに老年層に残存状況を示していると理解される。「ぜ」はこうした背景のもとに、同じ告知機能を持つ「よ」と複合して「ぜよ」となり、とくに高知県では「ぜ」とともに用いられるようになったと考えられる。しかし、「ぜ」から変化した「で」の方が幅広い年層に支持されるようになると、次第に力を失い、擬古的な創作ジャンルにおいてのみ、假想言語としての勢力を強めていったのではないか。その強力な推進役を土佐という地域バリュー、坂本龍馬という突出ヒーローが担ったことは、すでに見たように公告・宣伝に一目瞭然であろう。

最後に、「ぜよ」の品位についてまとめてみたい。吉川義一『土佐ことば 優れた独特の言語』(2013)には、大河ドラマ『龍馬伝』について、次のような所感が述べられている。

第五回であったか六回であったか、派手な衣装を身に着けた藩主山内容堂が登場し、重臣吉田東洋に「どうぞよ。おまん」と声を掛ける場面があった。殿様が、下々の使うオマンやドウゼヨを使うだろうか。使うはずがない。雑で俗な土佐弁の乱用である。(中略)

一般的に「……がじゃ」「したがじゃろう」「おられるがですか」など〈が〉と〈ぜよ〉の頻用が気になった。用語の選択と遣い分けが的確にされていない。方言指導が適切にされていないのではないか。雑な言葉を使うと、粗雑で下品な人間に見える。

「下品」という評価は、すでに「ぞよより下品な語」(土井『土佐の方言』)があり、これに近い「男言葉」(渡辺『龍馬語がゆく』)、両方を合わせたような、「ぜ」は男言葉であり、上品な言いかたにはならない」という藤原与一(1985)の見方があった。つまり、「ぜよ」の「ぜ」が辿った軌跡をほぼなぞるように、「ぜよ」の男性語化が進行したことになる。

『日本国語大辞典』(小学館)によれば、まず、「ぞ」と「え」の複合形「ぞえ」が「ぜえ」となり、さらに「ぜ」となるのが安永ごろ(1772~1780)、「ぞえ」に比べ待遇価値は低く、江戸時代には早くも男性語化が起り、明治以降現代に至るまで東京語では男性語、これに対して、上方では、寛政(1789~1801)以降男女両用であった「ぜ」に、明治以降は「ぜ」から変化した「で」も加わり、次第に「ぜ」より「で」が優勢となった。

『NHK大河ドラマ・ストーリー「龍馬伝」後編』には、土佐のことば指導に当たった岡林桂子・馬場雅夫の両氏による次のような解説がある。

侍はこればあの酒で乱れたらいかんぜよ。(武市平平太)

(前略) ~ゼヨは文尾につける相手に対する呼びかけ。ヨをつけずに~ゼと言うときもあ

る。例：「何の用ぜ」。ゼヨのほうが強い感じになる。（「お国ことば辞典」）

「ぜ」と「ぜよ」の違いに触れた適切な指摘である。『龍馬伝』に対する先の吉川氏の批判は避けられないとしても、「ぜよ」の乱用が抑えられていれば、「粗雑で下品」という評価にまでは至らなかったのではないかと惜まれる。

「ぜ」にとって代わった「で」の優勢は現在高知市でも確認できる。高知県出身の漫画家、西原理恵子の絵をあしらった路面電車の日乗車券に「乗りまくりながで」があり、「さいばら電車」と名付けられた電車の車体には絵とともに、ドア部分に「はさまるきね 気をつけんといかんがで」があり、さらに、「毎日々かあさん」（『毎日新聞』2016年10月24日）には、高知の同級生との会話に「私らの頃 あんなん、なかったでね」「ウチらあねえ 娘が外人やき ものすごいで」「ホンマに意地クソの塊やったでね」「その薬 私も前飲みよったで」「りえちゃん しんどいことあるやろけど 傷つかれんで」「自分らあなんぼ 見つめたちかわらんで」のように、「で」「でね」「でねー」が用いられている。「ぜよ」や「ぜ」よりも「で」や「で〜」が栄えている事実は認めざるをえない。

おわりに

2016年8月6日に開催された高知大学オープンキャンパスの人文社会科学部人間文化コースの企画の一つとして、日本語・日本文学プログラムから「土佐のキャラ弁「〜ぜよ」——出自と動向を探る——」と題する模擬講義を担当した。高校生に方言への関心をもってもらうための格好のテーマと考え、耳目になじんだ「ぜよ」を狙上に載せることを思い立った。当初は年来の疑問とその解決の糸口をみつけられれば十分と考えていたにもかかわらず、「ぜよ」を論じることは予想したよりもはなはだ困難であることがすぐに自覚された。もう逃げられないと覚悟をきめ、取り組んだのが本題である。

「キャラ弁」とは、「ぜよ」を説明するために独自に創り出した「キャラクターの方言」の意味で使ったが、指導学生の指摘により、「キャラ弁」とはキャラクターをあしらった弁当の意味で、すでに世間に広まっていることを知らされた。「弁」は口から出すものと口から入れるものの双方に用いられていることを確認する仕儀となり、もはや「キャラ弁」は使用不能に陥った。

方言の使用がキャラクターによって広められ、繁栄をきわめる実態は、これからの方言のありように大きく影響を及ぼすことになるのかどうかは今もって判然としない。ただし、人間の意図が言語を操作し、方言キャラクターの創出に深く関わる実例を「ぜよ」の動向に観察することができた。人々の生活語からは遠ざかってしまった「ぜよ」が、再び人々の日常会話に蘇る期待は薄いものの、地域を代表する顔として今後も君臨し続

けるだろう。

オープンキャンパスが終わったあと、路面電車の中に「太平洋の向こうと、大学の向こうに、未来は広がってるぜよ。」という大きなポスターを見つけた。四国にある他大学のオープンキャンパスを知らせる広告である。高知県の受験生に向けたコピーだが、「広がってるぜよ」はいかにもしっくりこない。「ぜよ」の前までは現代共通語で、方言的な言い回しはないからだ。土佐弁の知識が少しでもあれば「広がっちゅうぜよ」と呼びかけるところだろう。最後を「ぜよ」で締めれば土佐弁だと言わんばかりの生硬さが、却って「ぜよ」の認知度の高さを物語る。

かつてはリアル（現実）言語であったはずの「ぜよ」が宣伝や広告、小説や漫画などの創作物の中で、あたかもヴァーチャル（仮想）言語として、この21世紀に息づいている様子は「ぜよ」の衰退どころか、さらなる繁栄を予測させる。方言話者の心配をよそに、龍馬と緊密に結ばれた方言を担うキャラクターの存在が、「ぜよ」が日本で広く知れわたることになった、最も大きな要因である。同時にまた、これは、「ぜよ」の持ち味が龍馬の（思い込まれている）キャラと響き合って、本来の「ぜよ」の表現効果を拡大する一方、性差のない言語から男性語、そして「龍馬語」へ適用範囲を狭めていくという、アンビバレントな現象として定位できるだろう。

謝辞

演習・実習を通して指導に当たった学生たちの、方言に対する真摯な研究姿勢がもたらした成果と、講義での呼びかけに応じた受講生が、多方面にわたる広告・宣伝に目を向け蒐集した資料を存分に活用して、この論を進めることができた。深く感謝している。

文献・資料

市原麟一郎『新編 日本の民話37 高知県』1985年10月1日 未来社

上野智子「阿波方言の文末詞デ(一)」1984年5月20日『方言研究年報』第26巻 和泉書院

小川萌乃「愛媛県喜多郡内子町の方言文末詞」平成26年度高知大学卒業論文

京都国立博物館『坂本龍馬—その手紙のおもしろさ—』平成14年7月31日 便利堂

高知縣市町村教育委員会連絡協議会『高知県人物読本 土佐の巨星』1979.3.31 第一法規出版

高知県児童詩研究会『やまもも』第8集 1984.5.1 高新企業株式会社出版部

高知県文化生活部文化推進課『とさぶし』第10号 2015.3.24

こうち男女共同参画社会づくり財団『高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃ

あない』2005年12月27日

国立国語研究所『日本のふるさとことば集成』第17巻2003年11月25日国書刊行会

国立国語研究所『方言談話資料』(2) 1979秀英出版

斎藤健次『まぐろ土佐船』2001年1月20日 小学館

JR-GROUP『長崎デスティネーションキャンペーンガイドブック2016.10.1▶12.31』

田中ゆかり『方言コスプレの時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』2011年9月29日 岩波書店

土居重俊・浜田数義『高知県方言辞典』昭和60年12月20日 高知市文化振興事業団

土井八枝『土佐の方言』昭和10年5月1日 春陽堂

土佐教育研究会国語部編『高知の伝説』昭和54年1月20日 日本標準

土佐教育研究会国語部編『高知のむかし話』昭和51年9月1日 日本標準

日本史籍協会『坂本龍馬関係文書』1929年12月25日(2003年12月1日復刻再刊)

日本史籍協会叢書115 東京大学出版会

日本放送協会編『全国方言資料』第2巻1981.4.10日本放送出版協会(1967年の復刊)

日本放送協会編『全国方言資料』第5巻1981.4.10日本放送出版協会(1967年の復刊)

日本放送出版協会『NHK大河ドラマ・ストーリー「龍馬伝」後編』2010年8月5日

藤原与一『日本方言辞書』1996年9月20日 東京堂

藤原与一『方言文末詞(文末助詞)の研究』(上)(中)(下) 1982~1986 春陽堂

前田勇『江戸語大辞典』昭和49年11月25日 講談社

前田勇『近世上方語辞典』1964年4月20日 東京堂

松谷みよ子・桂井和雄・市原麟一郎『日本の伝説22 土佐の伝説』昭和52年9月10日 角川書店

宮地佐一郎『龍馬の手紙 坂本龍馬全書簡集・関係文書・詠草』1995年8月15日 PHP研究所

宮地美彦『土佐方言集』昭和12年10月24日 富山房

横田達雄編註『武市瑞山獄中書簡(妻及び姉・妹あて)』昭和53年3月20日

吉川義一『土佐ことば 優れた独特の言語』2013年6月8日 南の風社

吉田則夫「高知県の方言」『講座方言学8—中国・四国地方の方言』昭和57年12月20日 国書刊行会

渡辺瑠海『龍馬語がゆく』2006年10月10日 ロコモーションパブリッシング

(うえの さとこ 高知大学教授)